

月刊『カーサ ブルータス』  
\*Life Design Magazine

理想の家づくりの秘密、教えます

BRUTUS®

# Casa.

2

2018 vol.21  
FEBRUARY  
¥980



住宅&インテリア案内 2018

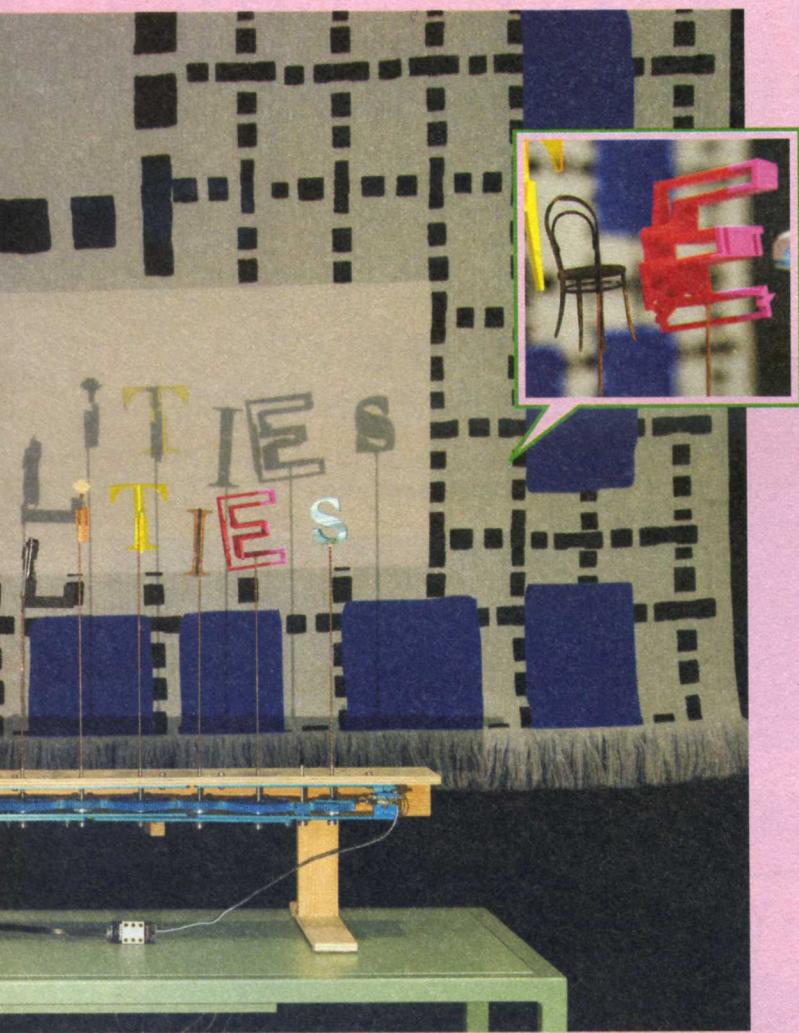
理想の家ベストサンプル

ヘラ・ヨンゲリウスとルイーズ・ショウエンベルクは、2015年ミラノサローネで「ビヨンド・ザ・ニュー・デザインの理想への探求」というマニフェストを発表した。デザイン界で名を馳せるオランダ出身の二人は、デザイン業界のエスカレートする新製品牽引の風潮に疑問を投げかけている。

17年秋からミュンヘン〈ピナコテーク・デア・モデルネ〉でスタートした展示は、このマニフェストをベースにした、世界で最も古い1万点を超える「デザインコレクション」、「ノイエザムルング(ニュコレクション)」とのコラボレーション。4台のカラフルな光と影のインスタレーションやパターンスタ(縦に並んだ複数の展示台がくるくると回転して入れ替わる自動循環プラットフォーム)を利用した作品など、この美術館だからこそできる動きのある展示だ。美術家がある特定の場所で表現する手法を「デザイン展でユニークに実現している。

「ビヨンド・ザ・ニュー」  
真のイノベーションを求めて。

展示のタイトルでもある「ビヨンド・ザ・ニュー」(新しさを超えて)のニューという言葉は、すなわち、イノベティブであるかどうかだとルイーズは語る。「現在の消費社会では、同じスタイルのデザインのバリエーションが出てきているだけのものが多い。新しいデザインが本当に革新的なのが、それとも世の中に新しいといふ名ばかりのものがまた増えるだけなのか、というのが私たちの議論です。このマニアックエストは、コンテンポラリーデザインが過剰



## DESIGN

### ヘラ・ヨンゲリウスが仕掛ける異色のインスタレーション。

ミュンヘンの〈ピナコテーク〉で、デザインとアートの垣根を越える、冒險的な試みが行われています。

展示を手がけたのはこの二人!

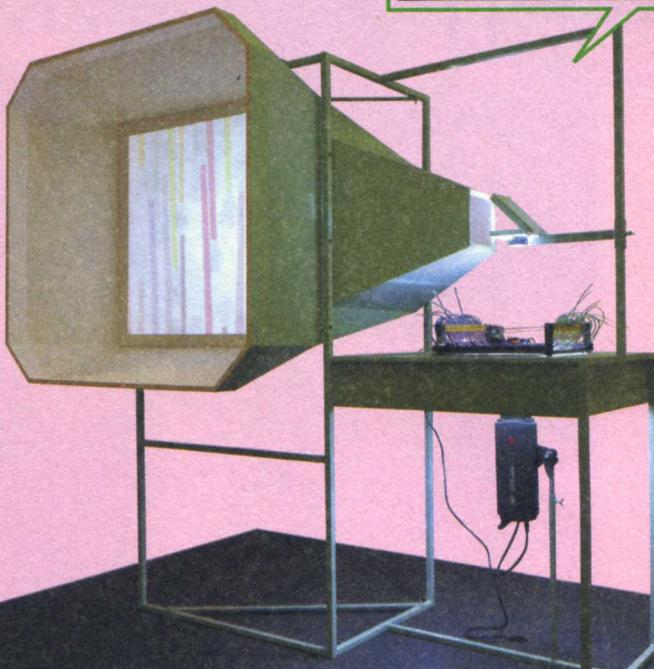
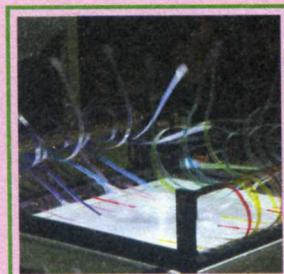
ヘラ・ヨンゲリウス プロダクトデザイナー。テキスタイルを中心に工芸と最新技術を融合し、独自の作風を貫く。〈ヴィトラ〉や〈ダンスキン〉のカラーディレクターでもある。

ルイーズ・ショウエンベルク アイントホーフェン・デザインアカデミー、コンテクスチャルデザイン科教授。ユニークな視点の現代美術とデザインに関する論評、著書多数。

なぜ、有り余るほどのデザインが世に生まれているのか?

[? why design for a world of plenty?]

毎年、無数のデザインプロダクトが生産され右から左へと流れるように消費されていく…その繰り返しの様子を、OHPに描かれたイラストを回転させて投射し表現している。



生産や行き過ぎたノベルティなど間違った方向へ進むことを危惧して、高い理想を嘆願したものなのです

デザイナーのヘラと教育者のルイーズ。彼女たちの一貫した姿勢は、とにかくリサーチを怠らないということ。

「色やテキスタイルを時代のニーズに合わせたりと、デザイナーとして産業と消費者をつなぐフィルターになりたいと考えてきました。17年間、何が私たちの社会に欠けているかを考え、実験を重ね、新しいアイデアを提示してきたのです」とヘラは自身のキャリアを振り返る。

またルイーズは、評論家・教育者として、過去と未来を配慮し、知識を常に時代に合わせてアップデートしているという。

「決定的な回答はないのです。た



テキスタイルに編み込まれた  
揺れるマニフェスト。

### [Beyond the New Manifest]

テクノロジーに懷疑的な人と彼らに批判的な人はどちらが正しいのか？ 垂れ下がった布には、両面から読むことのできる問いかけやメッセージが織り込まれている。



普段は機能的に使われる棚を  
横にして置いてみる。

### [Upside Down - Reading the Archive]

デザインコレクション「ノイエザムルング」  
から選ばれた、メンフィスやイームズなど歴代の名作棚をあえて背を下にして配置。違う角度からオブジェクトとして鑑賞する。

過去の優れたデザインを通して、  
どれだけ実りある対話を導くことができるか。

### [?how to entertain a vivid dialogue with the archive?]

歴史は現在につながっている。今まで生み出された様々な技術を取り入れて織られた厚手のラグに、過去に交わされたものづくりに関するダイアローグの文字が投影されている。



16年のミラノサローネ期間中、ロンドンの「サーベンタイン・ギャラリー」とミラノのデパート「リナシェンテ」で展示された、同じマニフェストを表す〈外見の裏の探求〉という名の光と影のマシーンも、再び展示されている。ヘラの実験工房・ヨンゲリウスラボのメンバーが制作を担ったもので、光を操り、色とテキスタイルを扱ってきた彼女のティエストが強く反映された作品だ。さらに、彼女たちは、ピナコテークの地下に保管されているノイエザムルング所蔵コレクションから、デザイン史上に残る棚の数々を選び、背を床

歴史をひもとくアーカイブとインスタレーション。

世界の変遷に合わせて、私はデザインを再定義する必要があると思います」



デザインの可能性や潜在性は  
榨取されてはいないだろうか？

### [?has the full potential of design been exploited?]

「Possibilities」の文字をつくるオブジェが回転し角度が変わると、壁に投影されるのはトーネット、マルセル・プロイヤー、グルチッチなどの名作チェア！

『ビヨンド・ザ・ニュー』～9月16日。ガイドツアーなど関連企画あり。●〈Pinakothek der Moderne〉Barer Str.40 München (49)89-23805-360。10時～18時（木～20時）。月曜休。入場料10ユーロ。<http://dnstdm.de/>

デザインは、私たちの日常生活において最も重要な文化的領域の一つとなってきた。展示された棚が、なぜノイエザムルングの専門家によって選ばれ、所蔵品となつたのか？ デザインは自分たちの生活の中で、どのような役割を果たしているのか？ ヘラとリューズは変わりゆく社会に問いかけている。

「美術館はアートの住処であつて、機能を与えられたデザインの本来の居場所ではありません。もちろん、デザインも視覚的な面を考えられて作られていますが、日常生活に直結している「道具」です。しかし、こうやって美術館に収藏されることで、デザインは初めて「作品」となります」とリューズ。今回、彼女たちは、これらのインсталレーションを通して、「デザインを通り、デザインをあえて違った角度から見る試みをしていく。」

「そして並べた。エットレ・ソットサスの『カールトン』、その棚を燃やしたオランダ人マーティン・バースの作品、不無いの引き出しを束ねたドローグデザインのテヨ・レミによるコンセプチュアルデザインなど、時代を反映しているものが目を引く。」